

寄 書

夢のシンポジウム印象記

野 崎 昭 弘*

俗称‘夢のシンポジウム’、正規の名称は‘電子計算機の将来展望シンポジウム’は、7月15日から3日間、熱海市水口の早稲田大学双柿舎で開催された。

参加者は名簿によれば29名で、東京在住者が多かったようであるが、遠方からも九州大学の栗原先生、東北大学の髙橋（理）先生などが出席され、活気のある会となった。全国の優秀な研究者を網羅しているとはいえないにしても、一つの強力なグループが形成されていたことはたしかである。

双柿舎とは、文豪坪内逍遙の旧宅である。海から少し離れた、小高い眺めのよいところにあつて、双柿の名は、その庭にある、300年を経たといわれる老柿樹にちなんで命名されたとのことである。

わが庵はもも年柿の枝越しに

咲く梅越しに青海を見る

思いのほか風通しがよく、特に暑さを苦にしないですんだことは、熱海の名におどかされていた私などには、望外の喜びであった。管理は落ち着いた感じの中年の婦人と、若くういういしい2人の娘さんにまかされているが、まったく家庭的な雰囲気で、なかなか好感がもてた。そのような場所がら、参加者一同気楽に気炎をあげ、親しく論じあうことができたのも、思えば当然のことである。

シンポジウムといっても時間割のようなものはなく、義務として課されているスピーチ（内容・時間随意）を代わる代わる前に出ては行なうだけであるが、自然に自由討論とまじりあい、時間が経つのも忘れられた。やはりシンポジウムは、本来の語源 *sumposion*（共に飲む）に近ければ近いほどよいようである。

談論の内容は、29氏の談話の要旨としてご紹介できるとよいのであるが、手許に記録がなく、また紙数もないので、恐縮であるが、私の印象に残ったいくつかの談話と、若干の感想を加えて、報告に代えさせていただきたい。

卒直にいつて、全体を通じて、特に珍奇な理論、新しいアイデアが示されたわけではない。しかし、夢とは研究者の人ががまさに露呈される場所であるし、その人がらにふれるということが、刺激にもなり、また楽しくもあった。また、夢そのものとは別に、夢の見方の中にも、多くの有益な情報が含まれていることに気がついた。そのような意味から、私に強い印象を

残したのは、たとえば和田英一さんの談話であつた。

和田さんの発想はきわめて具体的である。そのことは、名簿に付記されている‘特に関心ある分野’の欄にもよくあらわれている。（以下その引用）

1：絶対にプログラムミスのないモニターシステム、システムプログラムの作り方；

2：計算機にテレプロと電話交換機をつないだ情報社会

3：安く、小さく、高性能で、使いよくて、じょうぶで、ながもちする電子計算機の開発

これとは別に用意された予稿のほうも、長いので紹介はできないが、きわめて具体的な観察と空想とに満ちていて、大いに感心させられた。（新しい独創的な着想も、このような具体的な夢からでなければ、なかなか生まれないのではなからうか？）

南雲仁一先生、一松信先生のお話にも、別な意味で私は感心した。南雲先生のは、生体の情報組織について、よりよい測定から出発して研究を進めたいということだったと記憶するが、そういう手堅い仕事ぶりに、なにか羨しいような気さえした。私が興味をもっているソフトウェアの方面では、‘測定’に相当する、‘正攻法’と目される方法論は、今のところ見当たらない。

がいして理論屋は、‘役に立つもんか’ということまで旗色が悪かった。ただ早大の野口広さんの非同期式回路理論は、好評であつた。

日立の村田さん、富士通の渡辺さんのお話は、たいへんオモシロかった。（計算速度は5年で10倍になり、価格の下限は‘キロ当り500円’とのことである）東大の五十嵐さん（プログラムの理論）、日電の小林さん（オートマトンの理論）のお話も、私の興味と近いだけに、たいへん参考になった。その他多くの方が、システムプログラム、パターン認識、方式設計などについて、熱心にお話された。

自由討論では、立教の島内剛一さんが活躍した。‘システムデザインはEDSACにとどめをさす’との御説に、私はなるほどと思った。‘計算機をオモチャにしていけない’（日立中沢）という主として数学者に対する苦情が出たり、協調の精神の必要性（沖長谷川）など、薬になる発言が多かった。

短期間ではあつたが、有意義な試みであつたと信ずる。ご提案くださった山内先生に感謝するとともに、幹事役としてめんどろをみてくださった米田信夫さん、早大の示村先生に感謝の意を表したい。

* 東京大学教養学部